

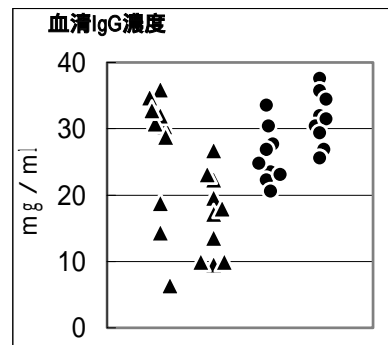
## 哺乳豚管理のワンポイントアドバイス

分割授乳を行い十分に初乳を摂取させましょう。

子豚は、初乳の摂取により母豚の免疫抗体を獲得します。初乳は、分娩後 3 日まで分泌されますが、子豚が吸収できるのは、生後 24 時間以内です。

そこで、出生後、できるだけ早く、全ての産子に均等に初乳を飲ませることが疾病の予防のためには非常に重要です。そのために分割授乳の実施をお勧めします。

夜間に分娩した場合は、翌日の朝、夕の 2 回（日中に分娩した場合、当日の夕方、翌日の朝）各 1 時間づつ大きい子豚を籠などに閉じこめその間、小さい子豚に自由に初乳を摂取させます。吸飲刺激を与えるため、大きい子豚を 1 頭だけ混ぜておくとより効果的です。



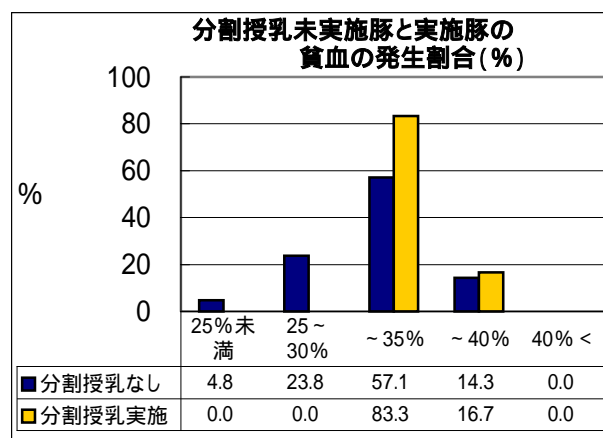
右上のグラフは、分割授乳未実施の 2 腹 21 頭（△）、分割授乳を実施した 2 腹 22 頭（○）の産子について 2 日齢時に血清 IgG（初乳中の主な免疫成分）濃度を測定した結果です。

分割授乳未実施の場合、血清中の IgG 濃度は平均 21.78mg/ml で 21 頭中 4 頭（18%）が初乳摂取不足である 10mg/ml 以下であったのに対し、分割授乳を実施した場合は平均 28.57mg/ml、最少 20.58mg/dl であり大きな改善が見られました。

また、初乳を十分に摂取させるため活力のない子豚には出生後、50%ブドウ糖 20ml を経口投与し哺乳する活力を与えてあげることも効果的です。

分割授乳は貧血予防にも効果的です。

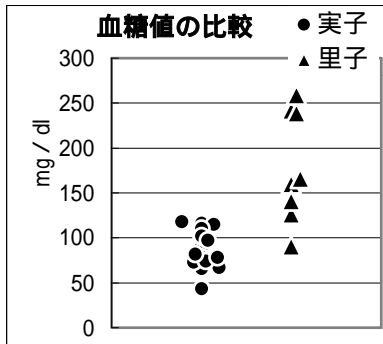
右のグラフは分割授乳を実施した 6 頭と実施しなかった 21 頭について 3 日齢での貧血の発生割合を比較したものです。分割授乳を実施した豚では貧血は全く見られなかったのに対し、実施しなかった豚では 28.6%の豚が Ht 値 30%未満の貧血を呈していました。初乳中には常乳の 3~5 倍の鉄が含まれるとの報告もあり分割授乳を実施することで貧血の予防効果もあるものと思われます。



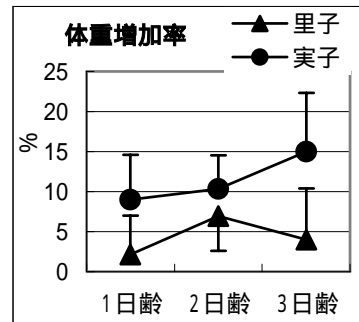
## 里子に出す場合には……

里子は、産子数の多い豚にとっては必要な技術ですが、実施に当たってはちょっとした配慮が必要となります。

右のグラフは、2 腹 21 頭（実子 13 頭、里子 8 頭）の産子



について生後 3 日齢までの体重の増加率を示したものです。実子（ ）に比較し里子（ ）では、体重の増加率が低いことがわかります。



また、左のグラフは、2 日齢時の血糖値ですが、里子（ ）では、ストレスにより副腎皮質ホルモンの分泌が

亢進し、高い血糖値を示したものと思われます。

副腎皮質ホルモンは、免疫機能も低下させることから里子では、疾病に対する抵抗性が低下していることが推察されます。これらのことから、里子を実施する場合、初乳を十分に摂取させてから行う、小さい子豚や弱い子豚は里子に出さない、また、4 日齢以降はそれぞれの乳頭が決まってしまうため 3 日齢以内に実施する等の注意が必要です。

### 4 日齢以内の死亡率を低下させるために

#### ～ 鉄剤の投与日齢と効果的な人工哺乳の方法について～

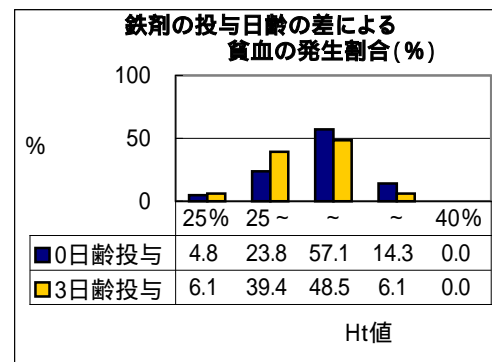
一般に、哺乳中の事故の 75% が生後 3～4 日以内に発生し、そのうち 3/4 はミルクを飲めないことによる虚弱死と圧死であると言われています。

そこで、3 日齢以内での死亡率を低下させることを目標に鉄剤の投与時期と人工哺乳の効果的な実施方法について調べてみました。

## 貧血予防の鉄剤投与は生後できるだけ早期(0 日齢)で実施しましょう。

新生豚は、初乳を摂取すると循環血量が増加し、赤血球数の相対的な減少が生じ貧血の状態になります。これを補うために体内の鉄が動員され赤血球をつくることによって鉄欠乏性の貧血となります。従って、貧血予防には鉄剤の投与が必要となります。

鉄剤の投与は、何日齢で実施するのが好ましいのか検討するため、0 日齢で接種した子豚（21 頭）と 3 日齢で接種した子豚（27 頭）について 3 日齢時に採



血を行いヘマトクリット（Ht）値を比較しました。その結果、0日齢で投与した群では貧血（Ht 値 30%未満）を呈した豚は 28.6%（平均 Ht 値 31.2%）であったのに対し、3日齢で投与した子豚は 45.5%が貧血（平均 Ht 値 30.0%）であり生後3日間で半数近くの子豚で貧血が生じていることがわかりました。このことから、鉄剤の投与は生後できるだけ早く0日齢で接種することが望ましいと考えられました。

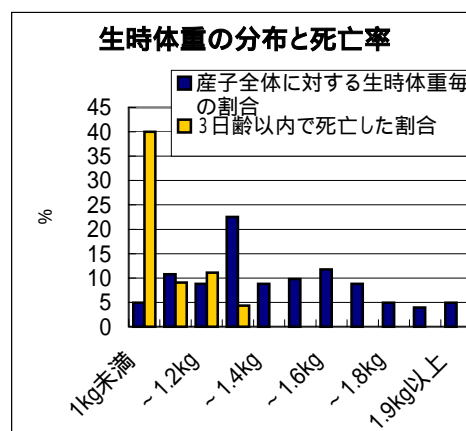
### 人工哺乳の対象は生時体重 1kg 以下を目安に。

生時体重は、産子数が多くなると低下しますが個体ごとでは 1.2kg は欲しいものです。

右のグラフに 10 腹 102 頭の産子の生時体重の分布と死亡率を示しました。

生時体重は 1kg 未満から 1.9kg 以上まで大きなばらつきがあり、生時体重 1kg 未満の豚ではその 40%が生後3日以内に死亡しています。

このことから、生時体重 1kg 未満の生存率をあげるには、何らかの人為的な補助が必要と思われます。



### 人工哺乳は 1日1回体重を測定し増加傾向を示すまで継続しましょう。

次に、どんな豚が3日齢以内に死亡するのか、3日齢まで体重の推移を調べて見ました。

右下のグラフは生時体重 1.25kg 以下の子豚 48 頭のうち 1~3日齢で死亡した 3 頭と生存した 45 頭の体重増加率（前日の体重の何%体重が増加したか）を示します。死亡しなかった豚は1日齢から順調に体重が増加していますが、死亡した豚は前日と同じ体重かまたは減少しており、自力での哺乳が困難だったと思われます。

従って、人工哺乳を実施する際には1日1回哺乳前に体重を測定し、前日と比較し体重増加が見られるようであれば一安心です。

人工哺乳は人肌程度に暖めたミルクを1日4~5回、20mlの代用乳を体重が増加するまで継続しましょう。

